



サテライトオフィス浅利内装改修デザイン提案

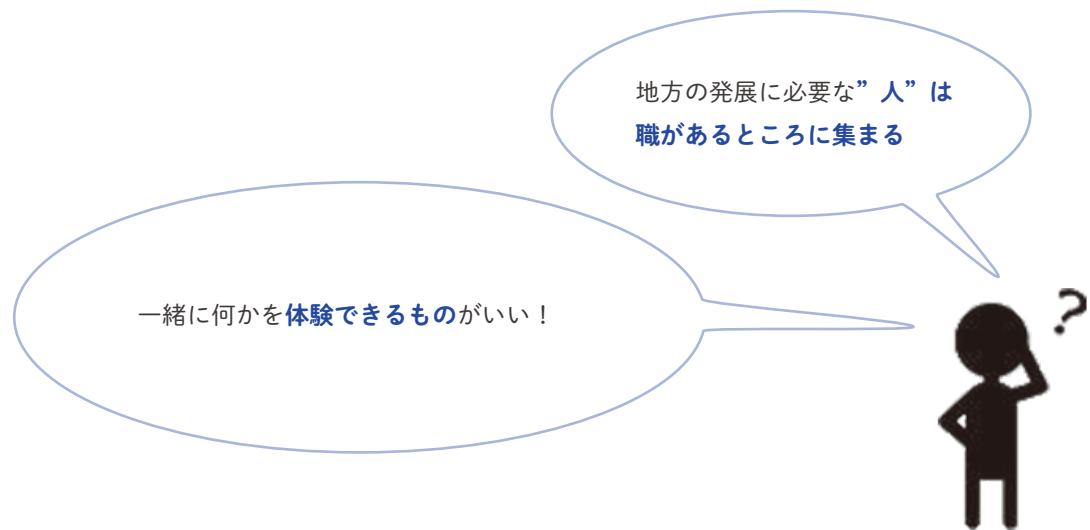
まだいける、大月 

村上穂乃花 G021G1605

繋がり、広がる

大月市に行った際に人の温かさを感じ、この”人の温かさ”というのを他の地域の人たちにも知ってもらうため、”人”をきっかけに人同士や、人と地域が繋がり、その輪が広がっていくようなものにしようと考えました。

人と人が繋がるには・・・



① コロナの影響による失業者の増加

② 大月市の地域課題の一つである後継者不足による地域産業の衰退や人員不足

この二点に注目し、職を通じて交流ができないかと思い、コロナによる失業者と後継者を求めている人や会社を繋げて、そこで短期間働き、よければそのまま職に就くというお試し職業体験制度を考えました。この制度は後継者不足を解消し、地域産業に活気を取り戻すというのを目的の一つとしています。

”一時的に暮らす場所”として建物を活用する。

① ターゲットが明確

やる気や技術はあるけど何かしらの理由で働く場所がない人などに働く場を提供します。良き人材が働きに来てくれることで効率的に街に活気が戻ると考えました。



コロナで失業してしまった人

- ・能力を無駄にしない
- ・市内の居抜き物件の活用
- ・街の産業の活性化



ひとり親家庭

- ・無料で職と住を提供
- ・子どもの力を借りて地域内の交流を増やす



日本文化に関心の高い外国人

- ・文化の違いを繋がりになかす
- ・職人技を経験する機会を提供
- ・後継者不足の解決

② きれいな住まいの提供

薄汚れたところよりも、きちんと整備された綺麗なところで暮らしながら働く方が晴れやかな気分でお仕事に集中できるのではと考えました。

住む場所をこちらで提供するメリットとしては・・・

- ・地域の建物を活用することで、住んだときのイメージが容易になり、定住しやすくなる。
- ・利用者を見守りやすく、お世話がしやすい。
- ・制度利用の際に住む場所を探さなくていいので気軽に利用できる。または、すぐ職に着くことができる。

③ 繋がる

人が交流し、繋がる場所として共用ルームを設け、そこを地域の人がゆるく過ごす場としても使います。

共用ルームは・・・

- ・職業体験者同士の繋がり → 定住しやすい環境に ...
- ・地域の人の交流 → 会話が生まれ、地域の繋がりも UP
- ・職業体験者と地域の方々だけでなく、サテライトオフィス利用者との交流 → 交流を通して新しい繋がりができる。
- ・地域との繋がりとして、大月の観光地や食べ物を買えるシステムの提供 → 地域活性化

全体の説明

真ん中の部屋を共用ルームにし、職業体験者が暮らす部屋を両側に配置することで、職業体験者が向かい合う状態で真ん中に集まり、より人が繋がりやすいような構成にしています。建物全体を大月市と考えさまざまな意味をこめてデザインしました。



仕上げについて

コンクリートは硬く、人の作為的な意匠が介入できない美しさがあり、経年変化する。色が変わったり、ひびが入ったりする性質。それを細やかに修復していき、また長く使います。

コンクリート仕上げにしている意図としては地や芯は固いけど、柔軟に変化していく大月の未来を表しています。たとえヒビが入ってしまってもコンクリートのよう細やかに修復し、色を変えながらずっと使われる、ずっと愛される大月でいてほしいという思いからコンクリートにしました。

木材について

コンクリートだけでは印象が冷たすぎる。大月の方々の温かさというのを表現するために木材を取り入れています。その材は、猿橋に使われていて、大月に馴染みの深いひのきを使っています。

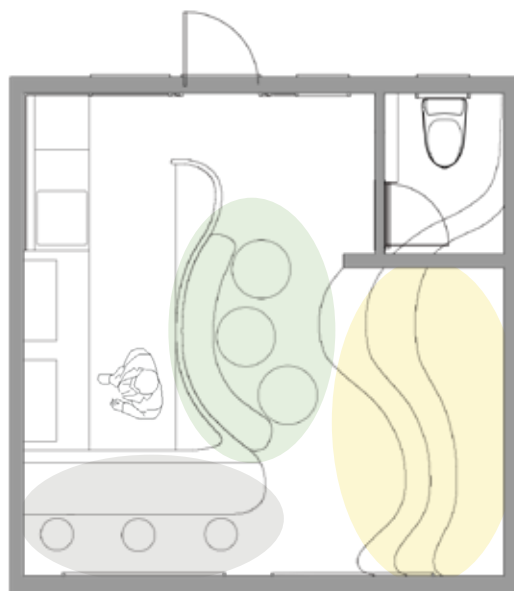
ひのきは暑さ寒さに耐え、寿命が長い木が多いことから縁起が良いとされていて、木材の中で耐久性に優れている木材でこれからも長く使えます。また、ひのきの香りに癒されながらリラックスしてゆるく過ごして欲しいと思いひのきにしました。

外部の説明

外部は大月市の子どもたちや、ターゲットにしているひとり親家庭のお子さんが遊ぶ芝生のスペースを設けました。岩殿山の等高線を簡単にした形です。等高線とは同じ高さの地点を繋げてできた線で、どこまでも続いています。

共用ルームで一番人が繋がる場所と芝生の一部を共有させることによって、人がこの場所から繋がり、広がっていく様子を表しています。





勉強や作業をするスペース

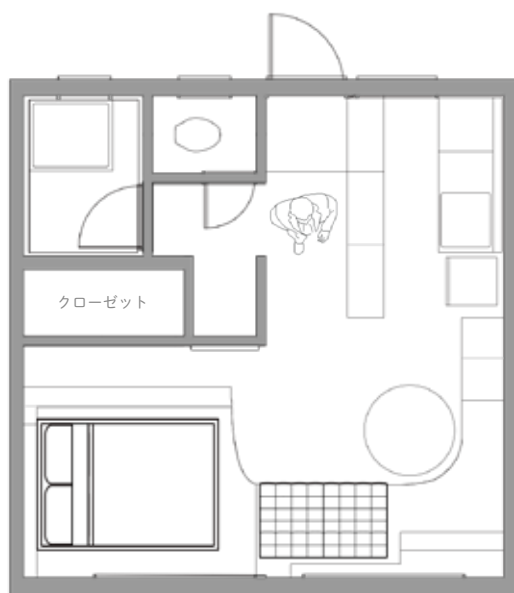
個人個人がそれぞれの作業をするスペースとして設けました。また、外国人の言語の違いを学びという形で生かし、コミュニケーションを通じて地域の人と外国人の方が繋がるスペースとしています。座る部分を緩やかな曲線にすることで、個人で作業をしていても、孤独を感じさせることなく、雰囲気に溶け込めるようなデザインになっています。

食事などをするスペース

キッチンで作ったものを食べるスペースとして設けました。外国人の文化の違いを食を通じて知ってもらい、地域の人とを繋ぐスペースです。それだけでなく、職業受け入れ先の方などが料理をふるまったりして、地域の人と職業体験者や職業体験先の人たちが食を通じてつながるスペースです。

いろんな人がゆるく過ごすスペース

いろんな人が座ってお話するスペース。椅子とテーブルを設置せず、自由に座るようにすることで距離感がより近くなり、知らない人同士でもゆるく話せると考えこのような形にしています。月の明かりに照らされながらリラックスして話ができるようにこのスペースに大きな月の照明を設けています。

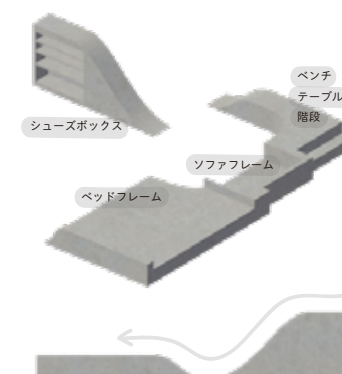


デザインについて

暮らす部屋では家具の機能を組み込んでデザインした什器にさまざまなメッセージを込めました。

この什器は部屋の雰囲気に合うようにモルタルで仕上げています。生活の一連の流れに沿うようなデザインにし、**生活の流れの全部にこの什器が関与**することで、**大月と共に過ごそう**というメッセージを込めています。また、日々よく使うものを収納し**支える**、人を直接**支える**家具と一体化させることで、**市全体で利用者を支える**というメッセージを込めています。

形は流れるような曲線で、横から見たときにこの什器が建物に解け込んで、**繋がって見える**ようなデザインにしました。



郡内織と色について

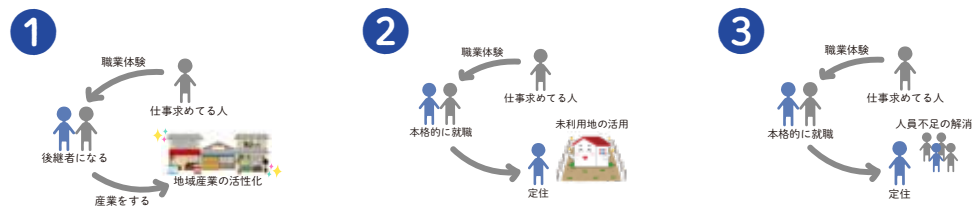
今は衰退してしまっている郡内織を復興させることを目的に、使用感を確かめ、郡内織を知ってもらい、購入してもらうために郡内織のクッションと寝具を使用します。

その色は大月市名の由来となっている、”月が一際大きく見えた”ということから、月が夜に光り輝き、月の光に照らされて少し明るい夜をイメージして藍色に統一しました。

今後の展開

定住しやすくなる仕組みを建物に組み込むことで、本格的に雇われるタイミングで大月市に**移り住む**ようにしている。職も住も大月で、となると市が掲げている二拠点居住の実現とはかけ離れるというのが懸念されるが、二拠点居住の実現には住みやすく魅力的な必要があると思う。誰もが住みたくなる街の実現には人が必要なのでまずこの案で人を移り住ませることで、二拠点居住実現の第一歩としています。

この案は大月市の課題である以下3点を解決させる望みがあります。



後継者不足等による商店の減少など**地域産業に活気がなくなった**

空き家や耕作放棄地、閉校跡地など**未利用地の増加**

地域行事の減少や近隣活動などの**人員不足**

市にこの制度の利用者として来た人を迎え入れ、その人たちが定住するよう、建物に仕組みを取り入れています。そして、人口増加に伴い、街に外部からのお店などができてがきて住みやすくなり、二拠点居住の実現に近づきます。

